

飼料用米の省力・低コストの確立に向けて

甲賀農業農村振興事務所農産普及課

【普及活動のねらい・対象】

甲賀管内は、重粘土質土壌で水はけが悪く、湿害により麦・大豆の作付が困難な地域も多く、生産調整は景観形成や保全管理等により実施している集落が多数あります。このような地域では、新たな生産調整作物として、飼料用米などの新規需要米への関心が高まっています。しかし、飼料用米は、配合飼料の代替であるため、生産物の販売価格は配合飼料の相場により高くは望めません。そのため、収益の増加には、収量の向上と生産コストの削減が急務の課題となります。そこで、平成20年産から飼料用米の生産に取り組んでいる集落営農組織において、多収性専用品種を用いた省力・低コスト生産技術の確立に向けて取り組みました。

【普及活動の成果経過】

活動内容

平成20年の多収性専用品種は、晩生品種のため、収穫時期が10月下旬と遅くなりました。そこで、平成21年は熟期の早い「夢あおば」を導入しました。

一方、省力・低コスト化にむけて育苗費用の削減、育苗箱取り扱い枚数が少ない疎植栽培と、従来のカルパーコーティングに代わる鉄コーティングによる散播の直播栽培の生育・収量・生産コストの検討を行いました。また、乾燥コストを削減するため、立毛乾燥について立毛中の初水分を成熟期から定期的に測定しました。



動力散布機による鉄コーティング種子の播種

活動成果

疎植栽培、鉄コーティング散播栽培ともに慣行栽培よりも収量はやや劣りましたが、経費と労働時間の削減が可能となり、収益性は同等またはそれ以上となりました。

立毛乾燥については、成熟期から約1か月間、ほ場で立毛乾燥することで17%台まで水分を低下する事が可能であり、乾燥コストの低減が可能であることが確認できました。

その結果、生産物の販売価格が安価となる飼料用米では、疎植や鉄コーティング直播栽培、立毛乾燥は省力・低コスト技術であることが確認できました。

さらなる増収を目指すためには、栽培地域、作付品種に見合った栽植密度や播種量の設定と穂肥量を増やすなどの施肥体系を見直した栽培技術の確立が必要であると考えます。

既に、平成22年度の甲賀管内での飼料用米生産は拡大する見込みです。今後は、甲賀の新たな生産調整作物の取り組みとして定着するよう支援をします。